ONE PIECE　永久に続く唄

三月兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　永久に続く唄

【Ｎコード】
Ｎ３２０９Ｐ

【作者名】
三月兎

【あらすじ】
時は大航海時代――――
偉大なる航路（グランドライン）を進む麦わらの一味はある日小さな小瓶を拾い上げた。
そこに書かれていた文字は失われた古代文字……歴史の本文（ポーネグリフ）に使われている文字だった。

時の魔女と麦わらの一味の冒険が始まろうとしていた。

始まりはいつも突然に

時は大航海時代――――

一人の大海賊が死に際に放った一言によって、宝を求め海に出た沢山の海賊達がひしめく時代。

この偉大なる航路（グランドライン）を一隻のキャラウェルが進んでいる。

この船の名は『ゴーイング・メリー号』

甲板に佇む美しい黒髪の女性……考古学者　ニコ・ロビンである。

静かに海を見つめる彼女が見つけたのは……

「ウソップ！　あの小瓶拾えるかしら？」

海を漂うガラスの小瓶。

彼女の呼び掛けに答えたのは……

「よぉぉし！　この最新作のびーるアーム君で華麗に拾いあげてみせよぉぉう！」

発明家兼、修理その他を行う長ッ鼻の男ウソップである。

ウソップは、賑やかに取り出したその、のびーるアーム君とやらで、地味ーに小瓶を拾い上げたウソップはそれをロビンに渡すと……

「ほらよ、んでそれなんだ？」

「えぇ、中に手紙が入っているようだったから」

「ふぅん」

「なんだなんだ？　何拾ったんだ？　食いもんか！　俺にもよこせーー！」

と、これまた現れたのはこの船の船長麦わらのルフィこと、モンキー・D・ルフィである。

「いや、お前が開けるの邪魔したんだろうが」

「んで、それなんだ？」

「人の話し聞けよ！」

本日も絶好調な二人であった。

「じゃあ開けてくれロビン！」

「はいはい……えっ？」

ガラスの小瓶から取り出した手紙、それを見た瞬間いつも冷静な彼女の表情が戸惑いに変わった。

そんな彼女にルフィ、ウソップも気付いたようだ。

「どうしたんだ……？」

「え、えぇ……この手紙の文字が……」

「文字？」

「古代文字なの……」

「えーっと、歴史の本文（ポーネグリフ）とかなんとかってやつの記号みたいな文字か？」

「そう……」

「ん？　ん？　何でその古代文字が書いてあるだけでそんなに慌ててるんだ？」

「この文字を書いた文明は、百年前にほろびているの。だから、こ

の文字を扱えるのは、百年前に生きた人間、もしくは私の故郷オハナの人間、他には海賊王ロジャーしかいないはず。」

それから何かを思い出すように黙りこむロビンに、

「ふぅん……それには何て書いてあるんだ？」

明るく声をかけたのは、ルフィである。

「あ、読むの忘れてたわえーっと……『この文字を読むことのできる人へ……私を助けて囚われているのは小さな孤島の一番下、場所は簡単ここへ流れる潮は一本だけ、この小瓶の流れてきた流れを遡るだけ……私を、この牢屋から助けて』……ですって」

「んーー……助けに行くか！」

「いや、マジで！？」

「だってロビン会いたいんだろそいつに」

「え、えぇでも……」

「いい！　冒険の匂いがするから！」

新しい冒険の予感にウズウズしはじめる船長に、ロビンは優しく笑い、ウソップはやれやれとでもいうように両手を上げたのだった。

「よし、ナミに進路変更いってこよーっと♪」

バタバタと走り去る船長とウソップを見送ったロビンの表情がまた遠い記憶に思いをはせていた事に気付いた者はいなかった。

導く潮のその先に

所変わって此所は操舵室、オレンジ色のショートカットの髪の美しい女性がいるロビンとは正反対の雰囲気の彼女の名前はナミこの船の航海士である。

「ったく、進路変更って毎回うちの船長は……」

「ナァミすわぁぁんっ♪　次は面舵ですかぁっ取り舵ですかぁっそれとも「サンジくん、後は潮の流れにまかせといて」はぁぁい！」

と、もう一人金髪とカールした眉毛がチャームポイントのこの船のコック、サンジである。

ちなみにさっきからナミにハートを飛ばしまくっている。

ナミは総無視だけど。

「にしても、ロビンの頼みなんて珍しいわね……何かあったのかしら？」

「そういえばそうですよねぇ……」

「何でも、ロビンの島の人が見つかるかもしれないらしいぞ」

またも現れたのは、ピンクの帽子の小さなトナカイ船医のトニートニーチョッパーである。

「ロビンの？」

「確かオハラだったよな？　でもロビンちゃん以外のやつらは皆亡くなったんじゃ……」

「俺はウソップから聞いたんだ、古代文字がどうのこうの言ってたぞ？」

「そう……ならしょうがないわね、大急ぎで向かうわよ！」

「はぁぁい☆」

「俺も何か手伝うぞ！」

それから三刻もたたないうちに、船の前方に小さな島が見えてきた。

「おーい島が見えてきたぞー」

見張り台から声をかけたのは緑の短髪に三本の刀と腹巻きの剣士ロロノア・ゾロである。

さっきまでのんきに昼寝をしていたのだが、先程サンジに踵落としを食らわされ叩き起こされた所だ。

その時のひと悶着はいつもの事なのでナミからのゲンコツにより収まっている。

「しーーまだぁぁっ！」

一番に飛んで行ったのはもちろんルフィ、特等席であるメリーの上に座るとワクワクドキドキ全開に足をぶらぶらやっている。

見えてきた島は、小さな島だが入り江は見当たらない……切り立った崖ばかりが見られた。

「ルフィ、上がるとこがねえぞ？」

「大丈夫！　よじ登ればいい！」

「……計画性がないな」

「「お前がいうな！」」

ルフィとウソップのツッコミがはもった。

と、甲板にクルーが全員集まった。

「それじゃ上陸だぁ！」

キラキラとした目をするルフィとゾロ、ロビン、サンジ対象的に青くなり始めたウソップ（「島に上がってはいけない病気がっ！」）、船を泊める作業をするチョッパーとナミ（「あんたたち早く準備手

伝いなさいよ！」）。

こうして彼ら麦わらの一味は新しい冒険への一歩を踏み出すのであった。

導く潮のその先に（後書き）

挨拶が遅れました。

はじめましての方ははじめまして、そうでない方はこんにちは！

初の二次製作作品というわけで書いております。

名前を変えたのには少しだけ意味がありますが……

まぁ、どうでもいいことですね。

えっとよろしくお願いします。

感想や苦情その他受け付けております。

感想もらえると嬉しいなー…

―海牢―

「ち、力がぬけるぅぅ……」

「ちょ！？　ルフィ？」

一味が上陸してから少し……

一番乗りに島に降り立った（よじ登った？）ルフィと、ルフィに掴まって共に上がってきたナミが見つけた地下へと続く階段……そこにルフィが足を踏み入れた瞬間、ルフィの大声が島に響き渡った。

「どうしたっ！？」

「これは……海楼石ね」

「ってことはロビン達、降りれないわね……ま、私達が担いでいけばいいか」

「えぇ……お願いするわ」

後からやってきたロビン達はルフィの大声に慌てて駆けつけたのだが、ロビンの冷静な判断により、新たな問題を発見する。
結局サンジがロビンをお姫様だっこ（ナミが誰かが担いでと言った時点でロビンの後ろに瞬間移動していた。ウソップ談）、

ゾロがチョッパーを片手に抱き、もう片方の手にルフィを引きずるという事で収まったようだ。

ナミが先頭で明かりを持ちながら降りていく。

「サンジくん、ここまでいいわ……ここからは普通の石みたいだから」

「はーい！　帰りもお任せあれ」

「えぇ」

一階分程おりると、海楼石から普通の石に変わっていた。

そこからもう一階ほどおりると景色が一変した。

「明る、い？」

今まで壁の岩には明かりや装飾は一切なかったのだが、此処から先は全体的に青のような緑のような色に淡く光っていた。

そして、

「ここまでね……」

ここがこの孤島の最下層、全員が階段を下り終えたときふいに声が響いた。

『また僕を使うつもり……？　もぅ……どうして放っといてくれないの？』

薄暗いため気付かなかったがここは一つの部屋になっているようだ。

声が聞こえるのは部屋の奥……格子の向こうからだった。

『海楼石の檻からじゃ何も出来ないと思ってる……？　僕を嘗めないでほしいな』

「誰だ？　お前？」

「ルフィ、むやみに声かけたらダメだと……」

「っていうか、あいつはさっきから何を言っているんだ？」

「さぁ？　ウソップお前誤解解いてこいよ」

「な、何で俺が！？　チョッパーお前なら大丈夫だ！（たぶん）」

「お、お、俺か？　む、ムリムリ！」

「話を……聞いてくれないかしら？」

『僕はもう、こんなの嫌だ……指銃（しがん）！』

――――――ガッ！！

「なんだっ！？」

「おいおいおい、後ろ壁、穴が……」

「やるか！」

サンジの頭の横を通り過ぎた『何か』は、そのまま壁に穴を開けた。

『君らはこの檻で反撃出来ないだろう？』

一味の中で飛び道具を使うのはウソップだけ……そして、あの格子は海楼石でできている。

「待って！　私に少しだけ時間をちょうだい」

早くも戦闘体制に入ったクルー達を止めたロビンに、仲間達は警戒は解かないものの武器を下ろして彼女に全てをゆだねた。

『く、くるなっ！』

「貴方を傷つけないと誓うわ……小瓶を、手紙を読んだの……貴方でしょうアレを書いたのは」

『アレを読めたのか……？』

「えぇ、古代文字は私の始まりだから」

『……この時代にあの文字を読める者……あぁアイツ等か』

「あなた……子供ね？」

牢に近づいたロビンには、薄暗い空間でも相手の容姿が見えるようになったようだ。

牢の中にいたのは、深くフードをかぶってはいるものの一目で幼いとわかる容姿の子供だった。

『だから何だ！　女だからって容赦しないぞ！』

「大丈夫、あなたをそこから出してあげるから」

『なぜ？　僕が扉を開けてもらってから攻撃しない保証はしない』

「かまわないわ」

『だから……僕を助けようなんて思わないほうがいい……』

「構わないと言っているでしょう？」

『変なやつ……鍵は部屋の隅の瓶の中に海楼石でできた鍵があるそれでここの扉は開く。』

「わかったわ」

『置いて行きたければこのまま立ち去れ恨みはしない』

尚も静かに近づくロビンに牢の中の誰かは黙りこんでしまった。

「誰か鍵を開けてあげてくれないかしら？」

「ロビンちゃんの為に俺がやる！」

「サンジくん、お願いするわ」

サンジによって開け放たれた牢の中にロビンが入っていく。

『く、くるな』

「あなたそこから出てこないつもりでしょう？」

『だって……どうせ階段上がれないし』

「連れていってあげるわよ？」

『お前の仲間は僕を連れていってはくれない』

「そんな事はないはずよ？　誰か上まで連れていってあげるわよね？」

「それは構わないが……ウソップ、お前誰も背負わないんだから連れていけよ？」

「いや、俺がルフィを引きずろう！」

「あ？　まぁいいが……そうゆう事でどうだ？」

『……変なやつら』

「フフッ……そうでしょう？」

「んーなんかよく分からんが皆で上まで行くって事だろ？」

「あんたはそこまで理解できればいいわ」

「んじゃ行こうぜ！」

「担いでくから文句言うなよ？」

『うん……あ！　一緒に僕の鎌も持ってきてくれないか？』

「了解」

こうして、また同じ道のりを地上まで上がっていった訳だが……

「ぞ、ゾロ！　その子丁寧に運んでやってくれ！」

突撃ゾロに一緒に担がれていたチョッパーが声をかけた。

「どうしたんだ？」

「すごい熱なんだ！　もう意識がない……あんなにも話せた事が奇跡なんだ」

医者として、相手の様態に危機を感じたらしい。

「あー……わかった」

「早く治療しないと死んでしまうぞ！」

「急げって事だな？　掴まってろよ！」

加速したゾロに掴まるチョッパーの表情は険しかった。

目覚めた人は……

ＳＩＤＥ　？？？

「……ん、ぅ……？」

目を開けると、知らない場所にいた。

ここはどこ？

声をあげることはしない。
命を守るためには、見知らぬ場所で目を冷ましたばあい眠り続ける方がいいに決まっているから。

静かに周りを窺うと……まず医薬品の匂いに気が付いた。

……何？
人体実験でもされた？
身体に痛みはない、ただ気だるさがあるがこれは眠っていたからだろう。

――――ガチャッ……

……！？
誰か入ってきた？
目を閉じて呼吸を安定させる。
狸寝入りなんて赤子の首を捻るより容易い。
案の定ソイツも気がつかなかったようだ。
「うん！　熱は下がったな、後は目を冷ますのを待つだけだ」
額に触れたのは何か堅いものだったけど……なんだ？
それに、声が幼い。
そして、何だか聞き覚えのあるような……
「にしても、この子が能力者なのはわかってるけどまさか眠っている間に変化するとは思わなかったぞ……」
ぶつぶつと呟きながら少し離れた椅子に腰かけたようだ。
何かを擦る音がする。
と、変化って言ってたよな？
もしかして……

SIDE　チョッパー

あの孤島の地下で助けた子供は、熱が酷かった事もあって俺達の船にのせて治療する事になった。

ルフィの事だから、きっとあの子の体調が全快でも船にのせてたんだろうけど。

高熱は、思ったよりも悪かったようで階段の途中で気を失ってからまだ目を覚まさない。

かれこれ3日目の朝になる。

さっき医務室（おれのへや）に戻って来たら、熱も下がって静かに眠っていた。

後は目を覚ますのを待つだけ……新しいサンブルボールの作成に取りかかろうかな。

それにしても、あの子の見た目の変化にはびっくりした。

海楼石の牢にいたから能力者なのはわかるけど……

変化し始めたのは一日目の夜……

†

「おーいチョッパー！　メシ食うだろ？　てめえが倒れたら元も子もねーからな」

「おぅ！　ありがとうサンジ」

「あぁ……ソイツどうなんだ？」

「熱が下がらないんだ……あの部屋から出た事による環境の変化に対応していないのと、疲労からだと思うけど……」

「汗が凄いから、このフード脱がせたほうがいいんじゃねえか？」

「うん、フードの中は聖域だからな……脱がせたら可哀想だと思ったんだ」

「聖域って……」

（フードを深くかぶってるのは、何かを隠したいからって事もあるから……な。）

チョッパーがその名を持つ前……自らの体験から、フードやコートは自分を守る為の大切な道具だと思っている。

「でもよ、そんな事言ってる場合じゃなくなってきてないか……？」

サンジが視線を向ける先では、布のかたまりとなってうなされている姿があった。

「布代えなきゃな……うわぁっ！？」

「なんだ！？」

振り返った二人が見たのは、掛けられていたはずの布団が吹き飛ぶ様子と……ベッドから一メートルほど浮き上がった子供の姿だった。

「な、何が始まるんだ？」

二人が困惑する間に浮き上がった子供のフードが落ちた。

「あの子……女の子？」

「いや、中性的な顔だけど口調は男だったぞ？」

言う間にも状況は変化していく。

その子供の身体が光をまといはじめたのだ。

「「……っ！？」」

一瞬目の眩む程の光を放った事で目を閉じた二人が再び瞼を上げたとき目にしたのは……

「「女の子……！　ってか誰だお前ーー！！」」

子供がいた場所に……１６ぐらいの少女が浮かんでいた。

†

ＳＩＤＥ　　？？？

さて、狸寝入りを始めてから随分たったけど相手は何の行動も起こさない。

私の変化には気付いているようだから……いや、気付かない訳がないな。

行動を起こされるより、起こした方が動きはとりやすい……？

武器は手元にない……

能力を使ってもいいがこの医薬品の匂いの充満した部屋で私に何があったのかを確認する必要もある。

……動こう。

――――ザッ！！

「ここは何処だ？　私に何をした？」
変な動物とは反対側、対角線上に距離をとる。
少し揺らいだが特に体に異常は「うわぁぁっ！　な、なんだお前、もう体調はいいのか！？　いきなり動いたら危ないぞっ！」
……物凄く怖がられているんだけど。
「えーと……私の質問に答えをくれないか？」
「し、質問か？　ここはメリー号の医務室即ち俺の部屋だ。あとはー治療した！　あ、アレルギーとかあったのか！？」
「特にないが……治療？」
「お前……覚えてないのか？　熱出して、気を失ったまま3日も寝てたんだぞ？」
……熱？
あぁそういえば、水牢にきた変な女のつれにこんなやついたな。
……そうか。
ほんとに私をつれてきたんだな。
「そうか……世話になったな。ありがとう」
「お礼なんてべつに嬉しくなんかないゾ☆」

顔がにやけているのに。

「それで私をどうするつもりだ？」

「それはルフィに聞いてみないとわからないからなー……あ！　皆心配してたし外に出るか！」

「わかった。」

ＳＩＤＥ　ナミ

「ナァミスワァァンッ☆　新作食べてくださぁい！」

「あら、サンジくん綺麗な色の飲み物ねいただくわ」

あの孤島に行ってから３日目、サンジくんとチョッパーがあの子の変化を知らせてくれた時はびっくりしたわ……。

そろそろ目覚めるころかしら？

「みんなーっ！　目を覚ましたぞー！」

やっぱりね。

船室から出てきたのはチョッパーと……うん、眠っている顔を見て思ったけどかわいい子ね。

15，6歳かな？
まだ幼いけど……初対面ではもっと小さかったんだけどね。

「おー治ったのか？　良かったな！」

「チョッパーもお疲れさん」

一番に飛んで行ったのはルフィ、好奇心の固まりになってるわね……
その次は一番近くにいたゾロ。

「お嬢さん……貴女のような美しい御方に出会えて俺は……」

目をハートマークにしながら飛んで行ったのはサンジくん……
ドン引きされてるわよ？

「あ、ありがとう？」

ったく、女の子困らせてどうすんのよ。

全員がそろったところで私から声をかけることにする。

「はじめまして、私は航海士のナミ、こっちの麦わら帽子が船長モンキー・D・ルフィでコレがコックのサンジくんそれから、あっちが剣士のロロノア・ゾロで、あなたを治療したのが船医のトニートニー・チョッパー、あったのが射的手のウソップで、あなたを助けたのがニコ・ロビン……よろしくね？　あなたの名前を聞いてもいいかしら？」

一通り紹介すると、一人一人を目で追ったその子は、

「私にはたくさんの名前があるの……何を言えばいいのだ？」

「たくさんのって……」

あぁそれもそうか。

きっと奴隷としていろんな呼ばれ方をしたのね。

「時代によって違うのよね……一番気に入ってるのは三月（みつき）そう

呼んでくれないか？」

最初の方が聞き取れなかったけど……ミツキっていうのね？

「わかったわミツキ、ちなみに賞金首だったりは……？」

「んーと、今は違うはず……通り名は『時の魔女』よろしくお願いします。」

「『時の魔女』っ！？！？」

ミツキの通り名を聞いたロビンが彼女に珍しく声を上げた。

「時の魔女ってなんだ？」

ルフィが首をひねっているけど、それは私もしらない通り名だわ。

「やっぱり考古学者様は知ってるのね……時の魔女世には流れぬ裏の歴史上何度もその名は聞くんじゃない？」

「えぇ……まさかこの目で見られるとはおもわなかったわ」

「ロビン？」

「あ、ごめんなさい説明……するわね？」

「どうぞ」

ミツキに許可をとってからロビンがかたったのは耳を疑うような……

衝撃的な事柄だったの。

時の魔女の伝説（前書き）

ごめんなさい！

名前がめちゃくちゃになってたので書き直しました！

時の魔女の伝説

「時の魔女……確かな存在かどうかはわからない……突然現れては消える。　わかっているのは、魔女と呼ばれていることから女であること……」

「そんな曖昧な……」

ロビンの言葉に眉間をよせたナミに、

「フフッ……考古学者さん長くなるんでしょ？　中に入った方がいいんじゃないか？」

笑みを漏らしたミツキに、

「えぇ……でもその前にミツキは着替えないとね？」

一行が改めてミツキを見ると、見えるか見えないかギリギリの丈の服（フードのやつ）そして……裸足で髪はボサボサ。

「ありゃ……私の服かしてあげるから部屋においでよ」

ナミが苦笑とともに手を差し出すと、

「うむ？　とくに支障はないぞ？」

ミツキは不思議そうな顔で首をかしげるが……

――――――ブッ！！！！

「……！？　血の海に沈んだやつらがおるぞ？」

男達は、その姿に赤色の噴水を作り出すのであった。

「はぁ……ったくうちの男どもは……きにしないでおいで」

ため息をついたナミは、

「うむ」

ミツキをつれて船室に向かうのだった。

■□■□■□■□■□

「さて、ロビンそれじゃあ続きをお願いね」

メリー号の船内では、血の海から生還（？）した男達と、ナミ、ロビン、それからナミの服を借りて髪もナミによってポニーテールにされたミツキの姿があった。

「それでは始めるわね……時の魔女の伝説を……。」

†

時の魔女の名が知れ渡ったのは、海賊王ロジャーが産まれるより
はるか昔……この海を恐怖に沈めた海賊団がいた。
彼女達の名は『漆黒海賊団』船員はみんな女……
皆天女も恥じらう程美しく、男たちは一目でその虜となる。
容姿だけでなく、その実力もその時代一番であった。
その時代の海軍は、手も足も出せぬまま彼女達の暴虐を野放しにしていた。

その『漆黒海賊団』の船長……魔璃鎖と言う名の女は《時の魔女》と呼ばれた。
彼女は１３人の船員の中でも一番美しく……一番強かった。
そんな彼女達の名はある頃からぱったり聞かなくなる。
そしてそのまま、『漆黒海賊団』は姿を消した。
それから何年もたった頃……また《時の魔女》の名が世界に広まっ

た。

次に彼女が現れたのは、海軍（マリンフォード）だった。

その時彼女いや、その娘は名を瑠璃と名乗り……姿は9つ程の、少女だった。

魔璃鎖との共通点は、その通り名と漆黒の大鎌だけ。

そして彼女の娘というには時がたちすぎていた事もあり、直接そこに結びつけられる事はなかった。

少女は、素晴らしい成果をあげ次代元帥とささやかれ始めた頃……

《時の魔女》と名乗った少女はまたも姿を消したのだった。

†

「……この2つが代表的ね」

黙り込む一同と、よく意味のわかっていないルフィを目で追ったミツキは、不敵に笑うと、

「皆たくさん疑問があるようだな。答えるぞ？」

「じゃあ俺から……お前は本当にその『時の魔女』とやらなのか？」
煙を吐き出しながら聞いたサンジに、
「うむ。たぶんな」
「たぶん？」
「私の記憶に違いがなければ私の船のクルー達は、天女も恥じらう程の美しさではなかったはずだな。……あいつらの男勝りな性格はすごかったからな……」
「それじゃ私から質問！　それって何年も昔の話なんでしょ？　ミツキが生きているはずないわ？」
「私の身体は老いを迎えないからな……変化させることはできるが」
「消えていたのは？」
「時渡りをしたからな……その空白の時間には過去か未来で新しい冒険をしているぞ？」
「はいはい！　俺からも質問だ……ミツキ、お前って何さ·i――グフッ……」
ウソップが言い切る前にミツキの回し蹴りが顔面に命中した。
「女性に年を訪ねるのは失礼だゾ☆」
ウインクと共に人差し指を口元にあてる仕草はとても可愛らしかっ

たが、その下でピクピクしているウソップから蹴りの威力と……可愛らしい笑顔を不気味なものにするのだった。

「うーん……ミツキ！」

「うむ？」

しばらく考えこんでいたルフィが顔を上げると、

「お前仲間になれっ！！！」

「「「「「えぇっ！？」」」」」

この先の事

ＳＩＤＥ　ルフィ

「なーなーサンジーめーしぃぃ！」

ミツキが船に乗ってから、毎日ロビンはイキイキしてるし何よりアイツの話す昔ばなしは面白いんだ！

でも、今は飯だ。

今俺は腹ペコだからな。

「ったく今作ってんだろ？　おとなしく待ってろ」

「ルフィは本当に食べる事が大好きなんだな」

俺の隣に座ってるミツキがこっちを見ながら笑っている。

むむ？

「好きに決まってるだろ？　ミツキは嫌いなのか？」
「私は食べなくても生きていけるからな」
飯食わずに生きていけるなんてへんなやつ！
「でも、食べることはだいすきだぞ」
「そうだよな！　俺もだ！」
そんな事を話しているうちに、サンジが飯を作り終えたみたいだな。
でも、みんなが来るまで待たないと……
――――グギュルルル
「――――っ！　フフフッ凄い音ね」
「てめえの腹の中には何を飼ってんだよ」
ミツキには笑われるし、サンジには呆れられた。
「その音でみんな集まってくるのかも」
扉を開けて入ってきたゾロ達を見ながら、ミツキが呟いている。
うーん……
そうかもしれない。

とにかく今は飯だぁぁ！

†

ＳＩＤＥ　ロビン

文献を調べていると、彼女時の魔女　ミツキの事が様々な所で見掛けられた。

世間には、彼女の存在は架空の人物となっているらしい。

私がクルー達に話したのは、ほんの一部にすぎない。あの手紙の文字……彼女は『アノ時代』も生きていたのかしら？

知りたいようで触れてはならないことのような気もする……

この船に来たミツキは、その見た目……１５，６の少女のようにしか見えない。

これはフリなのかしら？

それとも、地？

サンジ君の作った夕飯を感嘆の声をあげながら食べる様子は、フリではないように思えるのだけど……

「ロビン食わないのか？」

「え？　あ、いただくわ」

今考えてもしかたないわね。

「ところで、ミツキはこれからどうするんだ？」

そういえば、ルフィが誘っていたけどミツキは返事をはぐらかしていたわね。

「とりあえず、知り合いのところに行ってみようと思っておる。けど……」

「けど？」

「皆と旅したい」

俯いたミツキに、演技っていうのは無理があるわね。

「もちろん俺達は仲間だろ？」

「おめぇは遠慮し過ぎなんだよ」

皆が口々に言ってるわね。

この数日で馴染んでしまったもの。

「ありがとう！」

得意げに笑うルフィや、優しく微笑むナミ達の姿は私にとっても大きな意味があった。

ＳＩＤＥ　　ミツキ

「ありがとう！」

ほんっと変な奴らだな。

でも……この時代の『仲間達』にも会いに行かなくてはだな。

この先の事（後書き）

よいお年を！

海の彼方に（前書き）

オリジナル突入です。

海の彼方に

ここは、メリー号の甲板。
コック、サンジのスペシャルジュース片手に女子組はティータイムであった。

椅子に腰かけて足をぶらぶらするミツキは、８歳ぐらいの幼少体になっている。

彼女いわく、サイズが小さい方が動きやすくて消費エネルギーが小さいらしい。

ストローを加えて遠海を眺めていたミツキが、突然海の一点を指差すと、ナミに向かって首をかしげた。

「島が見えてきたぞ？」

「そんなはずないわよ？　海図には島なんてかいてないもの」

指差す先に眼を向けたナミが言うと、

「私の目には島が……直線２０キロぐらいの所に見えているぞ」

無駄に人間離れした能力を発揮するミツキ。

「し、視力半端ないわね！　でもそっちに島は……え？」

海図に眼をやりかけたナミが変化に気付いた。

ナミの腕につけた記録指針（ログポース）は、先程までとは全く違う場所を指している。

「ど、どうゆう事！？」

「ログが書き換えられたのね」

ロビンがログポースを横目に見ながら答えた。

「書き換えられた……？」

「たまっていたログよりも強い磁力の島がログを書き換えたのよ」

ロビンが落ち着いて説明するなか、ナミの動揺は止まらない。

「で、でもっあっちに島はないはずなのよ！？」

「いけばわかるわね」

「そうだな」

「呑気ねあんた達……でも行くしかないか。　進路変更を伝えてくるわ」

年の功なのか、経験の差なのか二人は落ち着いている。
それにつられてか、ナミも開き直った。

「「行ってらっしゃい」」
手を振る二人に見送られ、ナミが操舵室に消えていった。

残された二人は、というと……

「本日も良い天気じゃ」

「そうね」

のどかな一時を送るのであった。

あべこべ島アマノジャク　上陸編

「しぃぃまだぁぁっ！！」

メリーの上にて声を張るルフィと、

「おっきてーーーー！」

昼寝中のゾロの上にて叫ぶミツキ。

そして、それを眺めつつ溜め息をつくナミ。

と、最近よく見られる光景だ。

「最近ミツキがルフィに影響されてきたと思うのよ」

「そうだな、どんどん賑やかになってきたしな……そんな事よりじ、持病の『島に上がってはいけない病』が（ガクガク」

真っ青に震えるウソップ。

「おーーい冒険弁当できたぞ」

サンジが船室から出てくると、準備は万端。

「冒険だぁぁぁっ！」

ルフィの笑顔は最高潮だ。

ＳＩＤＥ　ゾロ

バカデカイ声と、ぐらぐらする感覚で無理やり意識を戻された。

あーーだりぃ。

目を開くと、超ドアップのミツキの顔があった。

「――――ぉわっ！」

――――ゴンッ

「いっつ！？」

壁にもたれて寝てた事忘れてた……

「皆ーーゾロ起きたぞ」

「おぉ、ミツキちゃんえらいえらい、マリモつれて早く降りてこいよ！」

船の手すりをよじ登って下に叫んだ所を見ると、他のやつらは船から降りたのか。

ってかあんのクソコック、マリモじゃねぇっつーの。

「ゾロ早く降りるぞっ？　乗せてー！」

立ち上がった俺の足元で両手を上げて立つミツキがいた。

「あ？」

「抱っこ！」

……はぁ。

ったくしょーがねぇ。

持ち上げて、肩車してやるとどこへ片付けたのか片手に持っていた大鎌が消えた。

まぁ、いいか。

船を降りると、皆が待っていた。

「ゾロおせぇぞ！　早く冒険だ！」
相変わらずルフィは落ち着きがない。
森まで走ったと思ったらすぐに戻ってきた。
「ゾロ！　私達も走る？」
いや、落ち着きがない奴はもう一人俺の上にいた。
「走りたきゃてめぇが降りて走れ」
「けちぃぃ」
ぶつぶつ言ってるが降りる気配はない。
「ミツキちゃんそんなマリモより、俺のが絶対いいって」
サンジが向こうで何か言っているが、ミツキはあっちに移る気配もないな。
「サンジは浮気だからヤダ」
「うっ……」
ナミやロビンはクスクス笑っているがミツキは割りと本気のようだ。
つっても、腹が減ったらサンジにべったりだがな。

「はやくぅぅ！」

森の手前でルフィが手をふっている。

と、そこまで歩くと森の入り口に立て札があった。

「えーーっと、何々？　あべこべの森？」

立て札を読んだナミが首をひねった。

「あべこべって、嘘が本当で本当が嘘でってやつかな……？」

チョッパーも首をひねる。

「私この島聞いたことあるぞ？」

「ミツキが？」

「うむ、あったりなかったり島とも呼ぶ」

「なんじゃそりゃ……」

確かに意味がわからんな。

「昔酒場で聞いたんだーま、私も上陸したのは初めてだけどな」

頭の上のチビから、昔とか酒場とか言われてもしっくり来ないのは俺だけか……？

「そ、そうなの……危ない島？」

「いや？　只単に、あべこべなだけだから」

あべこべの島が安全かどうかは別問題だと思うが……？

「なーなーとにかく！　早く行こうぜ？」

ルフィがバタバタし始めた所だし、前に進む頃だろう。

「あーーぐだぐた言ってても始まらねぇ進もうぜ」

「そうだな」

と、まぁこんな感じで俺たちはこのヘンテコな島に踏み込んだわけだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3209p/

ONE PIECE　永久に続く唄

2011年10月6日07時38分発行